

トマ・コルネイユが描くローマ史 VI. 『ペルセとデメトリウス』

浅谷真弓

はじめに

オテル・ド・ブルゴーニュ座において1662年に上演された『マクシミアン』は、退位した先帝、マクシミアンによるコンスタンティヌス帝暗殺計画を軸に、現職のローマ皇帝とその皇妃、優秀な副官の恋愛模様を巧みに描いてみせた⁽¹⁾。政治的な事件と恋愛問題は一本の縄を絢うように相互に絡み合い、どちらか一方が欠ければ展開しない。しかし、『マクシミアン』と同年に同じ舞台上で上演された『ペルセとデメトリウス』はドービニャックによって失敗作と見做され、興行的に振るわなかったと言われる⁽²⁾。確かに厳密な悲劇の定義に照らし、当代の理論家の視点に立つと、不満の残る作品であったろう。残念ながらこの物語にはドービニャックが求める英雄は登場しない。タイトルロールのペルセとデメトリウス、二人の父のフィリップは人々が即座に驚嘆し、称賛する人物ではない。マケドニアの王位をめぐる現国王及び後継候補たちによる駆け引き、ローマの覇権、元老院の思惑、属国トラキアの統治問題、世論の形成など、政治的な要素は多数現れるものの、兄弟が実質上の捕虜となっているトラキアの王女、エリクセヌを奪い合う恋愛関係の纏れに比べれば、やはり力が弱く感じられる。トマの他の作品と同様、恋愛が政治的な成功に対する障害物なのではなく、政治が恋愛関係を複雑にし、成就を妨げているのは明らかだ。一読したところ、政治はもっぱら恋愛を描くための背景であって、主たるテーマとは考えづらい。そのような意味では、本作の悲劇の看板には偽りあり、としなければならない。むしろ登場人物間の恋愛の展開に主眼を置いた悲喜劇の系譜に連なり、評伝執筆者が「ロマネスクな」作品とした評価には納得がいく。なるほど、台詞は同時代の小説が得意とする繊細な心理描写に富み、情念に操られ、実子を、恋人を疑い、愛と憎しみに翻弄されて我を失う登場人物たちは「ローマもの」の枠組みをやや逸脱する。しかし、果たしてそれだけだろうか。親子、恋人たちの公私の葛藤は不十分で、政治は感傷的な恋愛の顛末を描く道具にすぎなかったのだろうか。判決を下す前に、もう一度、政治の場面と恋愛の場面で同時に二つの無実の罪を背負い、自刃したデメトリウスの言い分を聞いてみるべきだろう。現国王の父と王位継承者の兄が大ローマ帝国の後ろ盾を疑い、日々の動向を恐れた賢明な人物が単に失恋のみを苦にして死んだと考えるのは早急である。まして、長子相続が正統と見做される社会では、弟の死は常に政治的な意味を持つ。作者は一時なりと法学修行を積んだ。そして何より、「ローマもの」の先達、ピエール・コルネイユの末弟である。実質的な主役の死をそう簡単に許したとは思えない。

1. 再び、ローマを遠く離れて

筆者が17世紀のローマ史関連作品を読むに当たり、特にローマの周辺諸国、辺境地帯の事情に関して参考しているポンペイウス・トログスの『地中海世界史』は芝居や小説の材料になりそうな逸話の宝庫である。同時代のローマ人たちの興味を引くべく、抄録を作ったユニアヌス・ユスティヌスのセンスの良さがうかがわれる⁽³⁾。トマ・コルネイユの作品では、以前取り上げた1668年上演の『ラオディス』と翌1669年上演の『アンニバルの死』にまつわる二つの物語を読むことができる⁽⁴⁾。そこで今回もまた同書でベルセとデメトリウス兄弟の関係や事件の顛末がどのように扱われているか、確認しておこう。『フランス17世紀演劇事典』の作品紹介では、ティトゥス・リウィウスの『ローマ建国史』第39巻から第40巻が主な出典に挙げられているので、あくまで補足的なものである。

『地中海世界史』第32巻、第2節(368 - 372頁)によれば、事件より少し前、マケドニア王ピリッポス5世の不法を訴えるため、多くのギリシア市国の使節がローマへ赴いたと言う。問題に対処するため、ピリッポスの息子のデメトリオスが元老院へ派遣され、諸市国使節団との討論を行い、弁明に努めた。二度にわたり人質としてローマで養育されたデメトリオスの徳性を知る元老院は、苦情の多さに黙り込んだ彼を勝訴とした。「防衛の権利によってではなく、羞恥心による弁護で父への容赦を獲得し、そのこと自体が元老院決議によってはっきりと言い表され、その結果、王が放免されたというよりは、父が息子に与えられたことが明白となった」。だが、この成果に対して、父は感謝どころか屈辱を、兄は激しい嫉妬を感じた。兄のベルセウスは父に弟を貶める讒言を繰り返して、「自分が非難している犯罪を自ら」行い、「父は子供殺しへと押しやられ、王宮全体を悲哀の家にした」。邪魔な弟を排除したベルセウスは王位継承者ではなく王として振る舞い、ピリッポスを苦しめ、遂には病死させた。ピリッポスはローマに対抗する戦備を残しており、もし死ななければ、ベルセウスが使ったであろう、と推測されている。

さらに2人の兄弟は注でおおよそ次のように紹介される。デメトリオスはピリッポス5世の息子で、前197 - 191年と前184 - 83年をローマで過ごし、親ローマ的な態度がピリッポスの疑いを招き、前180年に殺害された。兄のベルセウスはマケドニア王国最後の国王で、在位は前179 - 168年。デメトリオスの親ローマ的姿勢に対抗してローマに対する独立的地位の確保に努めた。ベルガモン王国のエウメネス2世(親ローマ派)と第3次マケドニア戦争(前171 - 168年)を起こした。前168年、アエミリウス・パウルスにピュドナの戦いで敗れて捕虜となり、アルバ・フケンスで前165年または162年に死んだ。宮廷での父と息子、兄弟同士の争いはよくある家庭不和の名を借りたローマ対マケドニアの代理戦争だったわけだ。『地中海世界史』の著者、抄録作者は多分に親ローマ派にちがいないので断言はできないが、周辺諸国に対するピリッポスの圧制とベルセウスの反ローマ的姿勢、デメトリオスの「ローマ的」資質が見て取れる。ピリッポスとベルセウスには、同、第32巻第4節に登場するカルタゴの名将、ハンニバルの死についてなされるような、「敵ながら天晴れ」といった配慮や容赦は与えられていない。息子の才能と徳性に嫉妬し、疑心暗鬼になる父親と

後継者の地位を追われることを恐れる兄は矮小で野蛮な、一国を統治するに値しない人物である。かつてマケドニアを舞台に世界征服を夢見る息子のアレクサンドロスに脅威を感じたフィリッポス 2 世とは人間のスケールが違うのかもしれない。17 世紀の芝居の作者は、「歴史」には登場しないトラキアの王女を加え、フィリップ（ピリッポス）とベルセ（ベルセウス）父子の卑小さを強調し、「ローマの子供」デメトリウス（デメトリオス）の美質を際立たせる。主要な 3 人の登場人物の性質を殆どそのまま残して、人物造形が行われている点は重ねて述べておいていいだろう。しかし、今回ばかりは、恋人にすら疑われ、孤立無援のデメトリウスを遠く離れたローマは救ってくれない。ローマが示してくれる好意、すなわち姿なき強力な政治的プレゼンスこそがデメトリウスを窮地に陥れる。実在のデメトリオスと同じ運命を辿るトマの登場人物と敵たちをここで改めて紹介しておこう。

フィリップ

マケドニア王、ベルセとデメトリウス兄弟の父、ピリッポス 5 世。トラキアを征服し、属国とした。周辺諸国との紛争を抱え、新たな王を選任し、実質的に退位を迫ろうとするローマ帝国に脅威を感じる。デメトリウスに対する元老院と民衆（世論）の支持が目下の憂鬱の種である。兄のベルセ一派はこの憂鬱を現実的な疑いに変え、動揺と激怒に付け込んで、弟のデメトリウスを断罪、逮捕させる。

ベルセ

フィリップの息子、デメトリウスの兄、ベルセウス。優秀な弟に劣等感を抱くだけでなく、嫉妬し、後継者の地位を追われることを恐れる。人質となっているトラキアの王女、エリクセースを一方的に愛し、さらに王位継承権のある王女と結婚して空位になっているトラキアの王位に就くことを目論む。マケドニアとトラキアの王位を両方とも手に入れ、安定した統治をローマにアピールしたいところ、父王と利害が一致する。ローマ皇帝、クイントゥスの手紙を捏造し、デメトリウスが王位篡奪を企んでいる決定的な証拠として、フィリップを騙し、弟を逮捕、処刑させようとする。

デメトリウス

フィリップ王の息子でベルセの弟、デメトリオス。人質としてローマで育てられ、教養高く弁論術に優れるが、政治的な野心とは無縁なため、柔弱と見做される。トラキアの王女、エリクセースと相愛であったが、フィリップ、ベルセらの画策により、拒絶される。囚われの王女の立場を慮るあまり、亡命もできず、強硬な態度も取れず、絶望する。四面楚歌のうちに、兄の策略にはまった父王に逮捕され、国家転覆、王位篡奪の罪で死刑が決定される。

エリクセース

トラキアの王位継承者。故国を征服したマケドニアに囚われている。デメトリウスと相愛だったが、フィリップ、ベルセ、ディダスらの計略でデメトリウスを疑い、ベルセと結婚すると言う。結婚を承諾する条件に、先にトラキアへ帰還し、女王に即位することをあげる。誇り高く、王位継承者としての矜持と論理力を持っている。しかし、頭の良さが仇になり、結局自分の首を絞める。息

子殺しの罪に絶望したフィリップからトラキアへの帰還と女王即位を許される。

ディダス

フィリップの寵臣で、反ローマ派の急先鋒。娘とデメトリウスの結婚をフィリップ（実はペルセの差し金）に勧められ、身分違いを口実に断るが、デメトリウスが拒絶し、反抗しているとして、国王を激怒させる。父子の仲を裂き、混乱を起こしつつ、自分の権力を強めるのが狙い。フィリップに息子殺しを直接促すのは次期後継者として最も有力なペルセの依頼による。

フェニス

エリクセーヌのコンフィダント。多くは冷静な意見を述べるが、現実主義者であるがゆえに却ってエリクセーヌとぶつかる場面がある。デメトリウスの死のレシを行う役割を担うのは偶然ではないと思わせる。

アンティゴニウス

重臣、フィリップのコンフィダント。処刑の寸前、デメトリウス排除の計略に気づき、国王を説得する。翻意に成功するものの、デメトリウスが自刃してしまい、手遅れになる。

オノマスト

ペルセのコンフィダント。今後期待される絶大な権力に与るため、ペルセを突き付け、凶行に走らせる。

恋愛劇として本作を評価する場合、エリクセーヌの拒絶がデメトリウスの自殺の主な原因と見ることは極めて適切と思われる。しかし、それ以外に理由がないとするなら、デメトリウスは飛び抜けて「ロマンチックな」登場人物であり、かつて小説、『クレヴの奥方』を生んだフランスの舞台においても特筆すべき性質の持ち主だったと言わざるを得ない。また、ペルセによって仕掛けられた偽りの三角関係の末に、デメトリウスが排除され、破綻する非常にシンプルな筋立ては後の古典主義演劇理論が標榜する単純明快さを先取りしているようだ。さらに、「ロマネスクな」要素を豊富に含みながら、絶望へと加速する恋愛の展開は近代小説の波乱と急転を思わせる。17世紀の心理小説より、20世紀を生きる我々にとってはその方がずっと馴染みやすい。以下では、デメトリウスの自殺に至るまでの経緯をかいつままで整理してみよう。この物語で主人公を演じるのは野蛮なマケドニア人の兄でも優美なローマ育ちの弟でもなく、誇り高きトラキアの王女である。

2. 慧眼と迷妄、「不実な恋人」ができあがるまで

そもそも、反ローマ派の重臣、ディダスの娘とデメトリウスを結婚させ、デメトリウスの動きを封じることを提案したのは、ペルセの聞き役のオノマストであった。ペルセはディダスに向かって昨日の祝祭で自分がデメトリウスに殺されかけたと訴え、父王にローマが新たな王をマケドニアに与える日が迫っていると警告するよう頼んだばかりだった。新たな王の候補にはローマの覚えがめでたく、民衆（世論）の人気の高いデメトリウスが有力だろう。ペルセとディダスのやり取りを傍

近くにおいて、黙って聞いていたオノマストは2人きりになると、ペルセが弟を殺さなければ決して王位を継ぐことができない、と思いつくところまで恐怖と憎悪を煽り立てる。トラキアの王女、エリクセヌとの結婚は、仮にディダスがデメトリユスの舅となって親ローマ側に寝返ったとしても、ペルセに損をさせない手立てだ。トラキアの王位とデメトリユスの最愛の恋人は確実に得られる。もしかしたら、エリクセヌはデメトリユスにとっては、ローマの信任やマケドニアの王位とは比較にならないほど重要なものかもしれない。この点では、ペルセのみならずオノマストもデメトリユスの性格をよく理解している。ペルセが口にする野心の正体は弟のではなく、当人のである。観客ですら、前日殺されかけたのは実はデメトリユスの方だったと知るのは後のことなのだ。『地中海世界史』の記述のままに、ペルセは「己の罪を弟の罪として」語るのが得意だった。エリクセヌに対する愛情は野心のバイアスを受けて強く捻じれ、やがてどちらが本当の望みなのかわからなくなる。

エリクセヌは、モラルはさておき、対話する相手の知的能力を目覚めさせ、高める女性である。よく似た人物は本作より5年前、作者が初めて本格的に「ローマもの」に取り組んだ1657年上演の『コモド帝の死』に登場する⁽⁵⁾。トマが作った架空の「ローマ人」女性、エルヴィーは、後に記録抹消刑を受ける暴君、コモドをして哲人皇帝マルクス・アウレリウスの息子の名に恥じない死に方を選ばせている。エルヴィー同様、エリクセヌが『ル・シッド』に登場するカスティリア王女、ドナ・ユラーク以来、度々出現する慧眼を持った王女たちの列に連なるかどうかはともかく、未来の暴君であるペルセとの対話は十分聞くに値するだろう。デメトリユスを封じ込める策略を腹心のオノマストと相談した第1幕第2場続く第3場で、愛する人を前に、ペルセはまるで弟が乗り移ったかのような告白を行う。

(272)

Persée

HÉ bien, Madame, enfin un orgueil inflexible

Vous rendra-t-il toujours à mes maux insensible,

Et d'un feu si constant l'infatigable ardeur

N'aura-t-elle aucun droit de toucher votre cœur ?

Érixene

Si le ciel laisse en vous cette ardeur volontaire,

On doit n'aimer, Seigneur, qu'autant qu'elle peut

plaire ;

Et s'il contraint nos cœurs, ne m'accusez de rien,

Comme il force le vôtre, il peut forcer le mien.

Persée

Ah ! N'autorisez point ce mépris de ma flamme

Par ce que prend le ciel d'empire sur une ame.

(.....)

Et l'on est toujours libre à commencer d'aimer.

(273)

Érixene

S'il est ainsi, Seigneur, que vous le voulez croire,
De cette liberté ne m'ôtez pas la gloire,
Et souffrez qu'à mon choix on me voie ordonner
Du seul bien que les dieux semblent m'abandonner.
La Thrace où je nâquis par vos armes conquise,
Rend ma triste fortune à cet état soumise ;
Et, dans un sort si dur, ce m'est quelque douceur
Que je puisse du moins disposer de mon cœur.

甘い告白はエリクセヌの論理に対抗すべく、次第に理性に訴える方向へ変わり、実利を説いて承服させられないと知ると、デメトリユスとローマの陰謀についてもっともらしく語って聞かせる。別れ際のペルセの態度は恋する女性に対するものとはかけ離れている。まるで派閥の領袖が敵陣営に属する議員を一本釣りして味方に引き入れる場面を思わせる。トラキアの王位を餌に親ローマから反ローマへの転向を促す台詞には、共通の敵、ローマ帝国の影が張り付いている。

(273-274)

Persée

C'est ainsi qu'à l'amour votre cœur s'abandonne,
Son orgueil en secret accepte la couronne,
De sa possession il se fait une loi,
Mais il l'attend plutôt d'un frère que de moi.
Vous voyez trop d'ardeur suivre son entreprise
Pour douter d'un projet où Rome l'autorise ;

(.....)

Érixene

(.....)

Jugez, Prince, jugez au gré de votre haine ;
Pour venger cet affront, quoi que je veuille oser,
Tout l'éclat de la mienne est trop à mépriser.

Persée

(.....)

Je ne vous dirai plus qu'un amour si parfait

N'avoit point mérité l'outrage qu'on lui fait.
Du moins, en l'étouffant, assuré de vous plaire,
Je veux, s'il n'y consent, le forcer à se taire,
Et que votre fierté n'ait plus s'indigner
De l'offre d'un hymen qui vous feroit régner.
(....)

国王に提案をしに行く間に、よく考えるように促し、ベルセは去っていく。頭の良いエリクセーヌが考えれば、自ずと答えは出る。そして、観客の耳には、ベルセが口にした「完璧な愛」は彼のものとも、弟のものとも聞こえる。その愛を「窒息させ、黙らせる」決意はエリクセーヌとの対話で強固にされた。忠実な聞き役フェニスはエリクセーヌの願いが叶えられるチャンスを捕えるべきと進言する。トラキアの王位のためだけではない。彼女は、もしベルセの申し出を断れば、「あなたの愛するものにとって不吉なことになり」かねないことを知っているのだ。

(275)

Phénice

Vous devez accepter l'offre d'un diadème.
Si pour Démétrius c'est montrer peu d'amour,
La constance n'est pas une vertu de cour ;
Et le cœur le plus ferme aisément se pardonne
Une infidélité qui vaut une couronne.

この現実主義、波乱を避けようとするフェニスの率直な意見が高潔なエリクセーヌを激怒させる。エリクセーヌ自身、ベルセこそが卑しく、腹黒い野心家だということは重々承知である。考えを整理する間もなく、今度はデメトリウスがやって来る。

(276-277)

Érixene

Ah !Prince, il n'est plus temps d'opposer à l'orage
L'illustre fermeté d'un généreux courage ;

たとえ兄弟であっても2人の性質はあまりにかけ離れている。デメトリウスの徳が兄を苛立たせ、世論がデメトリウスを支持し、ローマが尊重してくれるからなおさらいけない。エリクセーヌはローマへの亡命を勧める。

Le peuple ici vous aime, & Rome vous estime,
Si c'est gloire pour vous, ce n'est pas moins un crime ;
Et ce crime est de ceux dont, par la trahison,

Un lâche ambitieux se peut faire raison.

(....)

Du moins l'éloignement vous offre du secours.

Fuyez, Prince, fuyez, la foudre est toute prête ;

A son indigne éclat dérobez votre tête.

Rome où, presque en naissant, vous fûtes élevé,

Par elle avec plaisir vous verra conservé ;

L'asyle est sûr pour vous.

議論において、正論が打ち負かした相手を味方に出来るとは限らないように、政治に疎いのではなく、同じ政治の土俵で戦いたくないデメトリウスをエリクセヌは説得できない。王位に対する野心を疑われたくないデメトリウスにとってはエリクセヌへの愛情だけが唯一残された行動原理なのである。デメトリウスの政治的な立場や対抗処置が予めエリクセヌによって奪われてしまう場面とでも言おうか、エリクセヌの論理が恋人の感情を駆逐し、デメトリウスを追い詰める。

(278)

Démétrius

Quel outrage à ma flamme

Moi, fuir ! Moi, vous quitter !

Érixene

Il le faut.

フェニスの助言に激怒したエリクセヌがデメトリウスに同様の説得を試み、彼とは逆に、政治にのみ依拠せざるを得なくなるのは実に皮肉だ。こうしてペルセとの結婚を愛ではなく、政治的な決着として受け入れる選択肢はできあがった。次に語られるエリクセヌの台詞はデメトリウスにとって以上に、彼女自身にとって冷酷で厳しい。

En vous le conseiller j'agis contre moi-même.

Mais, quoique votre vûe ait de quoi me charmer,

Qui se cherche en aimant n'est pas digne d'aimer.

(.....)

Ne vous aveuglez point quand le mal est extrême.

だからディダスの娘との結婚話が聞こえてくると、エリクセヌは、自分自身の選択とは対照的に、デメトリウスの政治的な判断（としての結婚）を否定し、まずは彼の心変わりを疑うのである。そして、他の女性への愛情を打ち消したいために、あれだけ信じようとしなかったペルセの言葉を

真に受けて、デメトリウスとは最も縁遠いはずの野心と彼の行動のすべてを結びつけて考えるようになる。先程フェニスが言った通り、宮廷では王位のための心変わりが正当化される。デメトリウスは反対勢力の首魁を抱き込み、ローマの威光を背に、マケドニアの王位を奪うつもりだ。マケドニアをローマの完全な支配下に置き、トラキアは征服されたまま併合されてしまうだろう。行き着く先は真の亡国である。王女の輝く才知、慧眼が恋人を死なせる迷妄に変わる悲劇はまだ幕を開けたばかりだ。

3. マケドニア対ローマ、あるいは兄弟は敵同士

第2幕第3場において、フィリップは前段までのペルセの告発を受け、デメトリウスに弁明の機会を与え、双方の言い分を改めて聞く。自らを裁判官とするなら、兄は被害者であり検察官、弟は加害者であり弁護人だろう。それにしてもこの裁判は最初からデメトリウスに不利だった。公平を装う裁判官を信じて、デメトリウスは懸命に弁論を行い、一旦は和解が成立するかに思われる。フィリップは約2頁、70行以上に亘って、論点整理というよりは、兄弟は争ってはならないとか王位の継承は神々の意志に拠るとか一般的な前置きを行う。その後、先手を取ってペルセが非難を始める。約4頁、120行以上の弁論は主に2点に集約できる。

1) デメトリウスはローマの威光と民衆の人気を振りかざし、兄を敬わない

2) デメトリウスは父と神々の意志を無視し、王位を篡奪しようとしている

フィリップが前段で述べたことに基づき、デメトリウスの行い（と称するもの）と具体的に照合させながら言い換えていくように見える。しかし実際には、「長幼の序を乱すことはそれだけで罪と呼ばれる」（287）などと、父の所論を極端な形に変えて繰り返しているだけである。国家が安泰であるためには死をも厭わない（284）ペルセが無実の人間と罪人を混同してはいけない（285）と言った矢先にさっさと断罪に及ぶのは慎重さに欠ける。挙句の果てに、殺さないでくれと嘆願したのはいくらなんでもやりすぎだろう。デメトリウスが驚くのは当然だ。ペルセより少ない、3頁半の反論は終始冷静に行われるが、指摘される事実がないことを証明するための、俗にいう「悪魔の証明」は困難を伴うはずだった。

(288)

Dieux, qu'il prend pour témoins des motifs de sa
craint,

Aidez ceux qu'il abuse à pénétrer leur feinte !

(.....)

Prince, si des long-temps formant brigues sur bri-
gues,

Je fais contre l'état de criminelles ligue,

Il falloit m'accuser de cette trahison

Avant qu'elle employât de fer & le poison.
(.....)
Le grand titre d'aîné, le jugement d'un pere,
Le droit des nations, tout veut qu'on vous préfère ;

さらに父の疑念に対しては、

(290)
Et si vers le sénat vous m'avez député,
Ai-je de cette emploi brigué la dignité ?
(.....)
Tant qu'avec eux la paix nous défendra les armes,
Leur alliance offerte aura pour moi des charmes ;
Mais, si vous en rompez le nœud mal affermi,
Ils trouveront en moi leur plus fier ennemi.

と簡潔かつ十分な弁明をしている。神々の意志という名の旧来の慣習、親子、兄弟の情に訴えようとするペルセに対して、デメトリウスは論点を整理し、筋道を立てた弁論を行い、ローマの元老院で通用する才知を示す。もはや反論の余地はない。観客は、この才知こそが父の窮地を救ったのだと納得するだろう。一方、舞台上の登場人物たちはどうか。弁論を終えたデメトリウスは父に息子としての恭順を誓う。論理的な正しさだけでは父と兄を説得できないこと、仮に説得できたとしても、共感を得られないことを知っているのだ。案の定、双方の言い分を公平に聞いたと主張するフィリップは家庭の平和を取り戻せることを願い、ペルセを伴って退場する。ところが宿題のように課されたデメトリウスの政治的な恭順の証はディダスの娘との結婚である。生々しく脈打つ家族の情に訴えることができなかつた彼には父ではなく王を、兄ではなく王位継承者を脅かさない契約を履行する以外に選択肢がない。要するに、デメトリウスの弁明はまったく効果がなかつたわけだ。ローマ流の論理や判断力はマケドニアの宮廷では意味をなさない。デメトリウスは正しかった。しかしその正しさは彼を家族から引き離し、孤立させる。恋人に疑われ、父と兄に疎んじられたデメトリウスには居場所がない。彼の正しさを理解し、温かく迎えてくれるローマは今やマケドニアにとっての「不実」の証拠だ。彼が最も恐れ、忌み嫌う不実が生き残るために残された唯一の方法となった。

しかし、宮廷政治の機微を知らないデメトリウスは自身の正義を貫くために、ディダス当人に相談を持ちかける。あるいは政治的な思惑を無視し、エリクセーヌとの愛を選べば、少なくともマケドニアの王位に野心はないと言える。王女はマケドニアの実質上の捕虜であり、現状ではトラキアにまったく影響を及ぼさない。王位継承権はフィリップが認めてはじめて有効である。ところが、王女自身は故国の王位継承に意欲があり、現状を打破すべく行動しようとしているのだから、恋愛至上主義が政治的な闘争の場からの脱出につながると考えるデメトリウスの計算的外れだ。父と

兄に直接対決した第2幕において、デメトリユスの政治と恋愛はますます癒着し、コインの表と裏のように一体化してしまう。もはや二つを切り離して展開することは不可能だ。第4幕での再度の直接対決は終始ペルセとフィリップの優位に進み、デメトリユスの敗北は決定的と思われる。第4幕第3場で口論した兄弟は父に咎められると、兄は素早く反応して逃げ去る。

(319)

Philippe

Quoi, toujours quereller ?Quelle nouvelle aigreur,

De vos divisions réveille la fureur ?

Est-ce là cette paix ?

Persée

Seigneur, je me retire,

Contre Démétrius je n'ai rien à vous dire ;

理知を嫌う父の性質を熟知し、巧妙な戦略をもって退場するペルセに対して、デメトリユスはその場に残され、兄弟喧嘩の責めを一身に負う。第2幕での先制攻撃に匹敵する戦いぶりだ。『地中海世界史』では、元老院においてデメトリオスを勝利させた沈黙が本作では皮肉にもペルセの退却に使われる。

(320)

Démétrius

Non, non, je n'ai parlé que pour me faire entendre ;

Et, quoi que son faux zèle aime à vous déguiser,

S'il ne m'accuse pas, je me veux accuser.

事ここに至っては、何を言っても無駄だ。すべてが小賢しい言い訳にしか聞こえない。洗練された明瞭な言い回しがかえって鼻につく。父の苛立ちはデメトリユスには理解できない。「正しいことを言っているのに、なぜわからないのか」というのが息子の正直な気持ちだろう。

(321-322)

Philippe

Ah ! De quelques forts traits qu'il soit au mien tracé,

Par sa coupable audace il est trop effacé ;

Je ne vois plus de fils où la noirceur du crime...

Démétrius

Oui, le mien contre moi vous rend tout légitime.

(...)

Mais, si vous achevez un hymen qui me tue,

Faites qu'elle soit prompte aussi-bien qu'imprévûe ;

(....)

Voilà de mon amour ce que veut l'intérêt,

Prononcez là-dessus, j'attendrai votre arrêt.

柄になく感情を爆発させ、言論という最大の武器を自ら封印したデメトリウスは以降舞台上に姿を見せない。ローマの美德、理知はこのとき事実上、死んだ。第5幕のフェニスによるレシはデメトリウスの死を目に見えず、触れることもできない、それだけいっそう取り返しのつかないものにする。フェニスは良くも悪くも現実を見定める力を持った聞き役であった。劇中、ほかには誰一人として情勢を的確に判断していない。その意見は時としてエリクセヌにとっては耳が痛く、観客にとっては出過ぎた、世間ずれしたものだった。だが、そんなフェニスこそ、舞台上と客席を橋渡ししてデメトリウスの死に臨場するに最も相応しい人物である。聞き役が語るデメトリウスの最期に耳を傾けよう。

(341)

Phénice

Plaignez son triste sort,

Démétrius n'est plus.

(.....)

Seigneur, il a parlé, Persée est innocent.

(342)

Il soupire, & faisant effort sur la faiblesse :

J'excute, a-t-il dit, l'ordre de ma princesse,

Et la mets en pouvoir de donner une foi

Qui n'aurait pû, sans crime, être à d'autre qu'à moi.

C'est moins que je dûsse au beau feu qui m'anime,

Que rendre par ma mort son hymen légitime.

父の激怒を予測して、極悪非道の兄を庇い、愛のために死ぬと言うデメトリウスはそれでもなお、自分の死がエリクセヌの結婚を正当化することを願う。彼女はトラキアの王位とマケドニアの将来の王妃の地位が欲しくてペルセと結婚するのではない。婚約者が死んだから、別の男と結婚するのだ。さらに、処刑のための毒杯を受け取る前に、自分で死んでしまえば、父親に息子殺しの罪を犯させないで済む。もちろん、兄にも弟殺しの罪を負わせないだろう。対外的にはローマ本国が最も嫌う政治的な混乱を避けられる。デメトリウスの愛は政治と不可分であり、本人の意志とは裏腹に死もまた愛のみで説明ができない。そうさせているのは当然ながら周囲の人間たちだが、より本質的には彼を育てたローマが、あるいはローマの精神が望みどおりの「甘い死」を許してくれない。

(342)

*Je l'aimois chèrement, mais malgré tant d'amour,
Qui n'en est point aimé n'est plus digne du jour.*

(343)

*Et si pour les grandeurs mon cœur eût soupiré,
J'avois chez les Romains un asyle assuré ;*

フェニスの目をじっと見つめて、最後の声を振り絞り、デメトリユスは王女の名を呼ぶ。

(343)

*Ses regards sur les miens s'arrêtent tristement,
Il nomme la princesse, & meurt en la nommant.*

まるでフェニスの目を通して、自分の姿がエリクセーヌに届くかのように。報告を聞いたフィリップは、自分自身に対して「不幸な政治家」と呼びかけ、父であることを辞めて、神々とローマの法のおかげで王になると言う。せめてこの家族の不幸に巻き込まないため、「おぞましい父親」から逃げるよう、エリクセーヌを促すのが精々である。息子を亡くしてなおひとりの父たることすらできない情けない状況は、しかし、神々でもローマの法でもなく、実際に己が選び、やってのけた愚行の結果であった。

*Fuyez, fuyez, Madame, un pere abominable ;
On partage un forfait à souffrir le coupable.
Rentrez dans votre Thrace où les dieux ennemis
Pour régner avec vous ont refusé mon fils,
Ce fils que de ma rage ils ont fait la victime,
Ce fils ...*

窮地を救ってくれた理知を忌み嫌い、嫉妬し、恐れた男は息子の死と引き換えにようやく現実に気づく。

(345)

*Démétrius attend les honneurs du tombeau,
Il a cessé de vivre, & je suis son bourreau.*

この父の味わう過酷さはかつて、1660年上演の悲劇、『ステイリコン』で、ステイリコンが味わうものとは少し異なっている⁽⁶⁾。ステイリコン自身の陰謀の犠牲となる息子のユーシェリウスは襲われた皇帝をただひとりで守ろうとして果てる。刺客を放ったのは父だが、自刃するわけではない。ス

ティリコンは息子が死ぬとは夢にも思っていなかったのだ。それに引き替え、フィリップはペルセが作った偽の手紙に騙されたとはいえ、良く確かめもせず、これ幸いと濡れ衣を着せたまま処刑しようとした。何度も弁明を聞きながら、敢えてデメトリウスの申し立てる「正義」を無視した罪は重い。作者はスティリコンには息子の後を追うことを許すが、フィリップにはペルセを残し、来るべきさらなる地獄を予感させる。アンティゴニウスの腕を借りながら退場するフィリップは願い虚しく、決して死ぬことができないのである。デメトリウスが死んで全うしたローマの精神はフィリップとペルセを生かしておくことで、マケドニアの敗北を決定的にし、やがて王家の断絶に至らしめる。歴史書の枠組みを通して見た場合、本作が感傷的な恋愛劇の名を借りた案外精巧な政治劇であり、ローマ史劇であることは否定できまい。

おわりに

最後の場面で、フィリップ王の無力な聞き役、アンティゴニウスはディダスが民衆の怒りを買い、袋叩きにあって殺されたことを報告する。民衆はデメトリウスの自刃とその原因となった陰謀において、ディダスが果たした役割を即座に知った。このままでは、ペルセの命が危うい。しかし、フェニスのレシとはなんと対照的な目撃談であろう。ラシーヌの悲劇、『ブリタニキウス』の終幕で、我々は卑怯者のナルシスが同じように殺される場面を聞いて多少なりと溜飲を下げるが、アンティゴニウスのレシにはどこか他人事のような印象を受ける。王の聞き役で重臣であった彼は程度の差こそあれ、ディダス同様、この危機を作り出した一人だ。一旦はデメトリウス殺しに加担しかかった。その責任の自覚が殆ど感じられない。フィリップの自業自得と言えばそれまでだが、部下に恵まれないと、一国の王がこのように惨めな退場をしなければならなくなる。理知を愛し、その力を信じたデメトリウスと理知の利点を受け入れず、嫌ったフィリップのいずれにしる穏やかに生きていくのが困難であるという点では、現代の観客に対してこの悲劇がもたらす感情の意味は小さくないだろう。中世文学を研究するフィリップ・ヴァルテールは、ローラン、トリスタン、ペルスヴァールというタイプの異なった英雄たちを比較し、エリアーデらの業績を引用しながら、「想像上の英雄が現実の英雄よりも先に存在することも多い」とし、さらに、「過去の作品群の解釈には、我々の現在の関心事が投影されることが多い。我々は過去の作品の意味を（客観的に作品群から掘り起こす代わりに）遡及的に作り出している」とも言う⁽⁷⁾。デメトリウスの「悲劇」が再び演じられる時、「歴史」は作者、トマ・コルネイユより我々にとっていっそう陰惨であるにちがいない。

使用テキスト

Thomas Corneille, *Persée et Démétrius, tragédie*, Œuvres, 1758, Slatkine Reprints, 1970, pp. 411-431.

*綴りは原文のまま採用し、引用は注に送らず、カッコ内に1758年版の頁数を示す。

注

- (1) 17世紀フランス演劇研究会、「エイコス」、XVIII、2016年、梗概、95-96頁。
- (2) オディール・デュスッド、伊藤洋監修、『フランス17世紀演劇事典』、中央公論新社、2011年、梗概、142-143頁。
- (3) ポンペイウス・トログス、ユニアヌス・ユスティヌス抄録、合阪學訳、『地中海世界史』、京都大学学術出版会、2004年、引用、参照箇所は注に送らず、その都度示す。
- (4) 上掲同書、「エイコス」、XVIII、99-102頁。
- (5) 上掲同書、『フランス17世紀演劇事典』、136-138頁。
- (6) 拙論、「トマ・コルネイユが描くローマ史 III」、中大仏文研究、第49号、2017年、1-18頁。
- (7) フィリップ・ヴァルテール、渡邊浩司訳、「ローラン、トリスタン、バルスヴァル、中世ヨーロッパの英雄の3つの顔」、仏語仏文学研究、第50号、中央大学仏語仏文学研究会、2018年、143頁、145頁。

後記

本論執筆に当たり、千石玲子氏担当、『フランス17世紀演劇事典』所収の梗概を参考にしました。改めてご冥福をお祈りいたします。